第13回 神奈川大学高大連携協議会フォーラム

第13回神奈川大学高大連携協議会フォーラム「高大接続に向けた入試改革と大学教育―大学入試における多面的・総合的評価の現状―」（主催・神奈川大学高大連携協議会）が8月3日に開催された。同フォーラムは、基調講演、実践発表、パネルディスカッションという構成で、会場の神奈川大学横浜キャンパス・セレストホールには多くの高校・大学関係者が集まり、熱心に耳を傾けた。2021年の大学入試改革を目前に控え、各大学が試みる入試の在り方などをめぐって行われた、発表や討論の概要を紹介する。

（文中敬称略）

司会：神奈川大学外国語学部中国語学科1年　榊　瑞希

開会あいさつ

義務教育から一貫した教育方針のもと学生に確かな学力を

神奈川大学高大連携協議会議長
神奈川大学副学長
三浦 大介

今回も、このフォーラムにご参加いただき、お礼申し上げます。多くの皆さんとともに本フォーラムを開催できますことは、主催者として大きな喜びです。ご登壇いただきます皆さん、またご準備いただいた関係者の皆さん、誠にありがとうございました。

13回目を迎えました本フォーラム。今回は「高大接続に向けた入試改革と大学教育―大学入試における多面的・総合的評価の現状―」というテーマで進めたいと思います。

2014年12月の中央教育審議会で「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」という答申が出されました。文科省は学力の3要素として①知識・技能の確実な習得②思考力・判断力・表現力③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度―を挙げ、これらを確実に育成することの重要性をうたっています。義務教育の段階から高校教育を通して確実に育成し、大学でさらにそれを伸ばし社会に送り出す教育が求められているのです。高校と大学、それをつなぐ大学入学者選抜においても「多面的・総合的に評価する」という一体的な改革が求められています。

今日のフォーラムではこのような状況を踏まえ、基調講演、実践発表、パネルディスカッションを通して、高大接続に向けた入試改革と大学教育について、皆さまとともに協議してまいりたいと考えています。

基調講演

「大学入学共通テスト」の問題作成と試行調査について

独立行政法人大学入試センター
試験・研究統括官 教授
大津 起夫

共通テストの準備状況は

本日は、試験問題作成に関わる者という立場から「大学入学共通テスト」の問題作成と試行調査についてお話します。

まず、センター試験受験者の傾向を統計的に見てみたいと思います。

今年のセンター試験の受験者数は55万4千人。1979～89年の「共通第1次学力試験」では志願者数は比較的安定していましたが、90年代、センター試験開始以降、志願者数は大きく増加しました。特に女子の志願者数が増えたのが特徴です。また90年には15％だった現役志願率が2018年には45％近くになっているという傾向も顕著です。

しかし、制度開始時から問題作成のシステムや、全体の運営体制などはほとんど変わっていません。

21年1月から始まる新しい「大学入学共通テスト」では、実施教科科目は現在のセンター試験と同じになる予定です。ただし、深く考えさせたり記述を行ったりという時間を考慮し、試験時間を少々増やすことになると思います。

年複数回実施すべき、という方針も中教審の答申では出ていましたが、これも現行の1月、年1回のみの実施となる予定です。本試験の約1週間後に追再試験を実施するという点は現行と同じです。英語は複数回あることになりますが、共通テスト本体の試験実施は変わりません。

17年11月には、高校2～3年生を対象に第1回試行調査を実施しました。新しい出題方式を検討するため、かなり"攻めた"出題が多く正答率が低かったのですが、あくまで検討素材ですので、そのままの出題形式や問題が本番で出るということではありません。

また、今年2月には英語と障害者への配慮として点字問題などの試行調査を行いました。英語に関しては、問題や正解例、正答率などもウェブで公開しています。今年11月には第2回の試行調査を実施する予定です。これらの結果を見た上で、適切な難易度と量に落ち着かせていきたいと思っています。

現行試験からの大きな変更点は、記述式を導入するということです。国語と数学Ⅰ（「数学Ⅰ・数学A」を含む）において小問3問の記述式問題を導入します。国語の場合は短いもので20～30文字、長いもので80～120文字くらいの記述、数学は数行程度の説明を書かせる予定です。

マーク式の問題も改善を行い、思考力、判断力、表現力が発揮されるよう出題を工夫します。例えば歴史なら豊富な史料を示して推論させるといった問題を試作している段階です。

来年度初頭には、文科省が新テストの「実施大綱」の策定、発表を予定しています。センターによる出題教科・科目の発表も来年度の早い段階を目指しています。

英語成績提供システム新設

最も大きな変更点の一つは英語の4技能評価でしょう。「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能を適切に評価するため、共通テストの枠組みにおいて、すでに一定の評価が定着している民間の資格・認定試験を活用するというものです。

これを具現化する仕組みとして「大学入試英語成績提供システム」を新設します。受験生から成績送付の依頼があった回の成績情報を、大学入試センターで一元的に集約し、要請のあった参加大学に対して提供するという仕組みです。

今年3月に参加要件の確認を行い、その結果を公表しました。今後はシステムの作成や、運用の細部を詰めていきます。

英語4技能試験情報ウェブサイト（http://4skills.jp/）というサイトもありますので、ご活用いただければと思います。

実践発表①

高大接続改革に向けたAO入試の導入―小規模大学ならではの入試改革の可能性

鎌倉女子大学
入試・広報センター長
河村 和宏

小規模大学の良さを生かした丁寧な入試

鎌倉女子大学は実学系の3学部5学科、単科短大を合わせて現在3千人弱が在籍する小規模な大学です。

本学では以前からAO入試（※1）を行ってきましたが、若干のミスマッチを感じ、2016年から国が推奨する審査・評価方法を取り入れたAO入試を導入しました。入試が複雑なために初年度は受験生に敬遠され、志願者が減りましたが、17年は元に戻りました。募集人員（管理栄養学科を除く）は定員の1割、38人で、倍率は1.6倍ほどの入試です。出願資格は専願であるということ、高校で積極的に学習に取り組んでいる人、それと正課外活動にも積極的に参加している人。部活や生徒会活動、ボランティアや検定、資格取得の何か1つでも力を入れてきたという人でなければ出願できません。

書類審査のあと、審査は1日目に集団討論（30分）とプレゼンテーション（15分）、2日目に小論文（60分）と面接（10分）というふうに、非常に手間暇をかけて行っています。1人の受験生に対して7人、教員の約6割がこの入試に携わります。

ここまで、丁寧な入試をやってみて結果はどうだったかというと、AO入試入学生の第1学年次のGPA（※2）が0.2ポイントほど上がりました。今後は入試で得られたさまざまな情報を入学後の学生指導に活用していきたいと考えています。

14年の中教審の答申には「すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために」というサブタイトルがついています。全ては未来を担う若者のためにという原点に立ち返って、小規模大学の強みを生かした入試改革にあたりたいと思っています。

（※1）AO入試：大学入試方法の一つ。各大学が定める入学者の受け入れ方針に基づいて、高校時代の成績、志望理由などを書類や面接などを通して総合的に評価する。日本では90年代から広がった。

（※2）GPA：グレード・ポイント・アベレージの略。成績を5段階の数値に置き換え、その平均点で評価する成績評価方法。米国の大学で一般的に行われており、日本でも導入する大学が増えている。

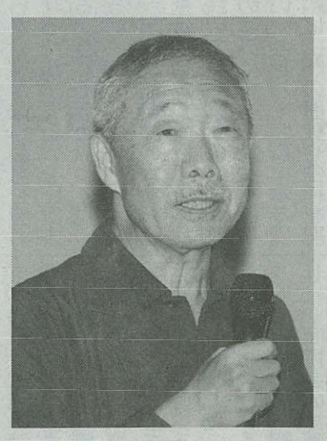
実践発表②

多面的評価の実践例―一般入試における面接実施について―

一般入試においても全員面接を実施

本日この場に本学を呼んでいただいたのは、おそらく一般入試においても全員面接を実施している変わり者だからではないかと思います。

本学は、外国語学部のみの単科大学で4千人ほどの学生がいます。どうして一般入試で全員面接などという無茶なことをやっているのかというと建学の理念を大切にしているからです。建学の理念は「言葉は世界をつなぐ平和の礎」です。アドミッションポリシー（※3）もこの理念に基づいて定められており、コミュニケーション能力や国際社会への関心、語学習得の強い意志を持っているかなどを重視して入試を行っています。この建学の理念は学生たちにもよく浸透していると思います。



神田外語大学
学術顧問（前副学長）
窪田 高明

コミュニケーション能力育成中心の外国語教育を目指す本学では、学生同士でやりとりをする場面が多くあります。また学生数に対して外国人教員の比率が非常に高く、日常的に教員と学生のお互いがやりとりをして授業をするというスタイルです。そのような授業スタイルに適応する学生を選抜するためには、学力試験だけでは測りきれません。それが一般入試でも全員面接を実施している理由です。

本学ではさまざまな入試制度を併用しており、AO型のプレゼン型入試と推薦入試では個別面接を行います。志願者数の多い一般入試では、近年では面接官1人に対し、1組6人のグループ面接で約20分間、使用言語は日本語という設定で行ってきました。全員に面接があるということ自体が受験者をスクリーニングする作用を持っており、さらにそれが入学後の出席率を高め、教員と学生の距離を近くするという好ましい影響を生んでいると自負しています。

（※3）アドミッションポリシー：各大学が、それぞれの特色や教育理念などに基づいて定める、入学者受け入れ方針のこと。

実践発表③

高大連携と高大接続改革に向けた神奈川大学の取り組み―経営学部の挑戦。多様な入り口から学生を発掘―

経営学部の事例紹介

神奈川大学経営学部は1学年530人、4学年合わせて約2100人が在籍しています。入試の種別は全部で15種類もあり、さまざまな入り口から学生を発掘するようにしています。定員はそれぞれにありますが、大きく分けて学力系試験で55％、推薦系で45％という比率です。

また「芸一能」の学生も、入学後に周囲への好影響をもたらすと捉え、最初からそのような入試を導入していました。

大学入学後のGPAと一番相関関係が強いのは、高校時代の評定平均値で、私たちはそこをきちんと見たいと思います。評定平均がとれている学生は「勉学の習慣ができている」ということ。本学入学後、さらにこつこつまじめに勉強する習慣を身に付けてほしい。私自身、国際経営論などを教えていますが、正直10年たつと講義の8割方は陳腐化してしまいます。最も重要なのは、問題発見力、課題解決力を養っていくことだと考えています。

もう一つ、社会からの要請もあります。企業はこれまであまり大学教育に期待してこなかったのですが、これからは大学にも、企業の要請に即した人材を社会に送り出す責任が求められていると思います。

これからの高大連携の改革の中で、現在の高校1年生から共通テストが始まります。2018年度中に彼らが受験生になったときどんな入試制度にするのかを予告・公表をする責務があります。現在、小委員会をつくって検討していますが、学部のカリキュラムポリシーとも連動して、入試プランを公表できるよう準備しているところです。

共通テストの傾向や狙い、われわれ大学側のポリシーが一致して、本当に力を付けてきた学生を取りこぼすことなく、努力を評価できるように、これからも努めていきたいと思っています。

神奈川大学
入試センター所長 経営学部教授
田中 則仁

パネルディスカッション

〈モデレーター〉
株式会社進研アド
『Between』編集長
中村 浩二

<パネリスト> 河村 和宏氏　窪田 高明氏　田中 則仁氏

中村　「多面的・総合的評価」に対する検討状況について、各大学に質問をさせていただきます。「共通テストの利用の有無」「英語の認定試験の活用の有無」「主体性などの評価になにを使うか」「新入試対応方針の発表の時期」についてお聞かせください。

河村　「共通テスト」「英語認定試験」については活用する方向で検討しています。「主体性の評価」はAO入試の知見を生かし、他の選抜に応用したいと思っています。発表の時期については総合型選抜と学校推薦については年内、一般選抜では年度内を予定しています。

窪田　現在もセンター利用入試の3科目型、4科目型で入ってくる学生は成績が良い傾向にあるので今後も「共通テスト」は使っていこうと思っています。「英語認定試験」は難しいながらも工夫しながら活用していく方向で検討していますが、多様な試験の中から高校生はどれを受けたらいいか、相当混乱が生じると思います。

「主体性の評価」は、私を含めて本学の教職員に高校生を評価できる能力があるとは思っていませんので、面接という方法以外では慎重に行います。eポートフォリオ（※4）の活用は現時点では考えていませんが、今後の検討では変化する可能性もあります。

田中　本学は7学部ありますが「共通テスト」は学科ごとで主体的に利用方針を決めることになります。「英語認定試験」の活用は学内でいろいろな議論があり、導入はしますが細かな導入方法は検討中です。「主体性評価」は、公募制推薦やスポーツ音楽推薦では利用することになると思いますが、現時点では全国で完成されているわけではなく、それを課すこと自体が公平性を欠くと思われますので、数年先に並行利用か部分利用といった程度になると思います。そもそも学生の学外の活動など、高校の先生がどれくらい確かに評価できるのかという疑問もあります。

要綱の公表時期については、本年12月中旬くらいにバージョン1を公表し、来年3月ごろにバージョン3を発表するというイメージでおります。

中村　ありがとうございます。「英語の4技能評価」についてのお考えをもう一言ずつお願いします。

窪田　多様な英語試験を横並びに扱うための変換式をどのようにつくるかという点はなかなか実現困難で、うちの学長が「完全な変換式ができたら売り出せるのではないか」という冗談を言いだしたほどです（笑）。厳密に変換式は成り立たないが、高校生の立場を救うという教育的な観点から、道筋をつくりたいと思っている次第です。

本学ではここ数年、文法力がないために語学力が伸び悩むといったケースが非常に増えていると感じています。本当の意味での4技能には文法を欠くと困るわけです。4技能の議論も、英語教育全体の中で見直していかなくてはならないと感じています。

田中　先日、英語英文学科の先生と話をしたところ、4技能のうち一番評価が難しいのがスピーキングとのことです。そこをもう少し充実させて、面接で英語による会話も含むとすべきかどうかという話をしています。英語は4技能がそろってはじめて使える道具になると思っているので、入試でも少し前面に押し出していくというイメージで考えています。

中村　「主体性の評価」について、大学では具体的に学生のどういうところを見ているのでしょうか。

河村　本学では人と向き合う専門職を目指す学生が多いので、出席状況が良好で学校行事にも積極的に参加してきたという学生が伸びると見ています。

田中　私の経験では学部創設初期の学生は目がキラキラしていた、何かしてやろうというエネルギーを感じる学生が多かったと思います。そんな学生をぜひ取りたいと思いますが、それがeポートフォリオの文面だけでどこまで読み取れるのか。それよりも書類審査の教員たちが「ここは要確認」と記して面接担当者に送るというような仕組みを丁寧にやっていくことのほうが、主体性評価のポイントだと思っています。

窪田　うちは入試の時点で主体性の高い学生を選ぶよりも、入った後に主体性をどう育てるかという仕組みがより重要と考え、現在全学でかなりのウエートを割いています。たとえばネーティブの先生が学内の施設に常駐してフランクに話をしたり、所定のトレーニングを受けた上級生がチューター（指導学生）となって学習の悩みを聞くなど、学生が自立的に能力を開発していく仕組みづくりを目指しています。

中村　最後に、高大接続改革についてお考えのことをお聞かせください。

田中　私は「守るべきは学生」という信念をもっています。高大接続とは、学生が成長していく過程でのシームレス化（つなぎ目の解消）ではないかと思います。一人格としての彼らの成長を守り、社会の宝にしていくために、学生の心に何かの火をともす、そういう教育の上での連携プレーができたらと願い、これからも先生方との連携プレーをよくしていきたいと考えています。

（※4）eポートフォリオ：電子化された学生の学習や活動の記録。レポートや教員からのコメント、部活動の記録などをICTを活用して蓄積。本人、教員などで共有し、進学・就職活動などに活用する。

熱い議論に多くの参加者が熱心に耳を傾けた

閉会あいさつ

神奈川大学高大連携協議会副議長
神奈川県立津久井浜高等学校長
小田 尚美

今年、新入試に初めて取り組む1年生を迎えましたが、高校の現場でもわからないことが多く苦慮しているのが現状です。そのような中で本日、各大学の取り組みを知ることができ大変有意義でした。このフォーラムを機会として、未来を担う若者を育てるという目的を共有している高校と大学が協働し、これからの教育活動や入試の改革に向かっていけるようになれば素晴らしいと感じました。

本協議会では、87の高校および神奈川県立総合教育センターと連携協定を締結し、数多くの事業を実施しています。今後も変わらぬご指導、ご鞭撻をいただけますようお願いいたします。